

キャンパスにおけるジェンダー分離； 日本・韓国・台湾の高等教育機関における比較研究

Gender Segregation on Campuses:

A Cross-Time Comparison in the Higher Education Sector among Japan, Korea and Taiwan

H26海人04

派遣先 第12回世界女性会議（インド・ハイデラバード）

期間 平成26年8月16日～平成26年8月25日（10日間）

申請者 山形大学 地域教育文化学部 教授 河野 銀子

海外における研究活動状況

研究目的

科学技術人材の獲得競争が世界的な規模で拡がっており、各国政府や学界も、科学技術分野の人材多様化の促進に取り組んでいる。欧米では、とくに女性科学技術者の実態を把握する調査研究が蓄積され、政策的取組が開始されている。しかし、アジアの女性科学技術者に関する発信はいまだにほとんどなく、欧米からはブラックボックス化しているといわれている。そこで、今回の国際会議では、アジア圏の科学技術分野の女性の現状を報告し、欧米からの要求に応えることを目的とする。

海外における研究活動報告

近年、我が国の各分野における女性の活躍度が低調であることに対する批判や懸念が国内外で起こっているが、科学技術分野も例外ではない。欧米では、女性の科学技術者が少ないことへの関心は、1970年代頃から高まるようになるが、教育の問題と認識されていた。しかし、1980年代頃になると、科学（技術）分野への女性の参画の低さはより広範な課題として認識されるようになり、実態を把握するため

の量的（統計的）研究や質的（参与観察など）研究が蓄積されてきた。その成果は科学技術政策にも反映され、女性研究者の参画促進プログラムが立案・実施されるようになっただけでなく、それらが次なる政策的取組を促すという好循環が実現しつつある。こうした往還を通して、この課題に対する視点は、「女性（女子）自身の問題」から、「組織の問題」へとシフトしてきた。その背景に、女子の理系科目への関心の低さや思わしくない成績が高等教育において当該分野を専攻する女子の少なさとされ、それを改善する教育プログラム等が行われ、当該分野を専攻する女性が増えたにもかかわらず、依然として科学技術分野で働き続ける女性は増えなかったという事実がある。このことが、組織文化の在り方をめぐる議論へとシフトさせた。そして、知の生産の場である大学等の制度や不文律が、専業主婦のいる（白人）男性のライフスタイルやそれに基づく価値志向を内包しているために、女性が参入したり就労継続しづらいことが明らかにされた。これらを受けて、家事育児等との両立を可能とする新たなしくみの構築が求められている。

翻ってアジアについてしてみると、科学分野での女性の参画の低比率という実態はあるも

の、それに対する問題意識および研究は少なく、世界に向けた発信もほとんどなされてこなかった。そのような中、2014年8月、インドのハイデラバードで開催された「12th Women's World Congress」において、“Gender Science and Technology: organisational and political interventions in Asia”というセッションがもたれたことは画期的であったといえよう。セッションには、イギリスのClem Herman氏 (Senior Lecturer/ Associate Professor, Department of Computing and Communications, The Open University)、インドのNeelam Kumar氏 (NISTADS)、韓国のEunyoung Lee氏 (Professor, Department of Science Studies, College of Natural Science, Chonbuk National University, Korea)、そして日本からは河野が登壇し、それぞれの報告の後、フロアとの質疑応答や全体討議が行われた。

河野の報告内容は、小川眞里子氏 (三重大学名誉教授) を代表とする日本・韓国・台湾の共同研究によるこれまでの成果で、東アジア3カ国の高等教育における女性学生 (ISCED 5Aⁱ & ISCED 6ⁱⁱ : 理論ベースの教育機関) およびその女性研究者の実態 (職位 : Grade C, B, A) を分析したものである。とくに注目した点は、① *She Figures 2012*ⁱⁱⁱ の27か国平均と東アジア3カ国の比較、②3カ国の経年変化についてである。

以下に①の特徴を表す図を、全専攻の合計と理工系分野に分けて示す (図1、図2)。

・全専攻計 (図1)

EU平均は、大学入学時の学生割合は女性の方が高く、3段階目 (ISCED 6, students) を境に男女の学生割合が逆転し、その後の男女差が

拡大している。グラフの形状から「ハサミの図」といわれているが、東アジア3カ国にはそうした特徴はみられない。ただし、台湾のみ、大学入学時に女性割合の方が高い。また、日本は高等教育の入口時点から男女間の差が大きい特徴がみられる。

・理工系分野 (図2)

EU平均においても男女間の差が大きく、「ハサミの図」にはならない。興味深いのは、EUの学生の男女間の差は東アジアのそれより小さいが、大学教員についてはEUと韓国の間にはほと

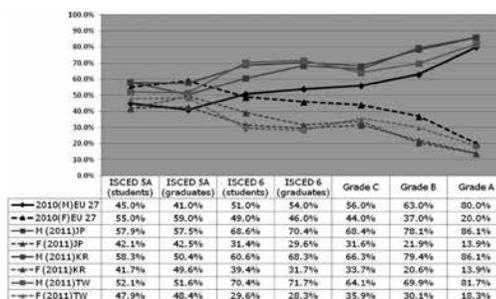


Figure 1 : Proportions of women and men in a typical academic career, students and academic staff, EU 27 (2010), JP, KR and TW, 2011

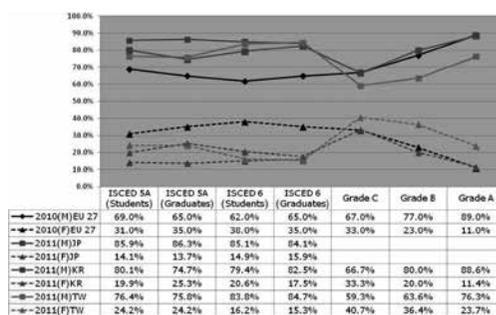


Figure 2 : Proportions of women and men in a typical academic career, students and academic staff, in S & T, EU 27 (2010), JP, KR and TW, 2011

i : 日本では学部と修士課程が該当

ii : 日本では博士課程が該当

iii : European Commission (2012) . *She Figures 2012. Gender in research and innovation: Statistics and indicators.* は、EUの政策エビデンスとして活用されることの多いジェンダー統計である。

んど差はみられず、台湾においてはEUより男女間の差が小さいことである。このように、それぞれが特徴をもっていることが示されたが、日本のグラフは、教育段階の4番目 (ISCED 6, graduates) までで切れている。大学教員について、分野と職位を同時に示すジェンダー統計そのものがないためである。

以上のように日本のデータは、科学分野への女性の参画促進を検討するのに十分ではなく、②についても、性別・職位・専攻のすべてが判明するデータがなく、全専攻計での比較しかできなかった。EUの科学技術政策がこうしたデータに基づいて推進されてきたことを鑑み

れば、今後の研究や政策のためにも、十分なデータの収集と公表が必要と思われる。

**この派遣の研究成果等を発表した
著書、論文、報告書の書名・講演題目**

今回参加した国際会議のセッション“Gender Science and Technology: organisational and political interventions in Asia”において、‘Gender Segregation on Campuses: A Cross-Time Comparison in the Higher Education Sector among Japan, Korea and Taiwan’ という題目にて報告した。内容の一部は『科学技術社会論学会誌』、および『人文論叢 (三重大学)』第32号に掲載予定である (印刷中)。また、セッションでの発表に基づく論文は、国際ジャーナルに投稿中である。